

令和4年度学生委員会活動報告

新入生オリエンテーション

2022年4月5日に新入生オリエンテーションを開催した。開催目的としては、新入生に交流の場を設けることで、今年も去年と同様に新型コロナウイルスの影響でオンラインでの開催となった。

今年から対面での学内の説明会やサークルの新歓が再開したことから、参加者数は100人ほどであった。

その中で、大学生の生活を知ることができる「スケジュール紹介」や「国大生についてのクイズ」、新入生同士で会話する「テーマトーク」など様々なコンテンツを行った。

人数の関係もあり、グループワーク時には、1班に1年生4人で、大学生スタッフがそこに2人入りサポートをした。



新入生オリエンテーションの目的として、交流の場を作ることであるため、下記のアンケートの結果を見て分かる通り、イベントとして成功できたと思う。

しかし、やはり参加人数が少なかったため、来年度は同じ時期に実施するのではなく、3月後半に開催すべきだと思う。

後記（感想）

最初は、プロジェクトのリーダーとして、一人で何とかしなければいけないと思っていたが、同期の3年生達や、2年生の後輩達がたくさんサポートしてくれたおかげで、かなり作業もスムーズに行えたとともに、みんなで完成させた良いイベントになったと思う。

反省点として、当日スタッフに対しての共有が遅かったことと、新入生が前後にどんなことをしているのかということを知る必要があったことが挙げられる。

結果として、今後に向けてはさまざま取権があるイベントであった。

（経済学科 3年 本田隼介）

アンケート ☆

質問 回答 25 設定

次にこのようなイベントがあれば参加したいですか？
25件の回答



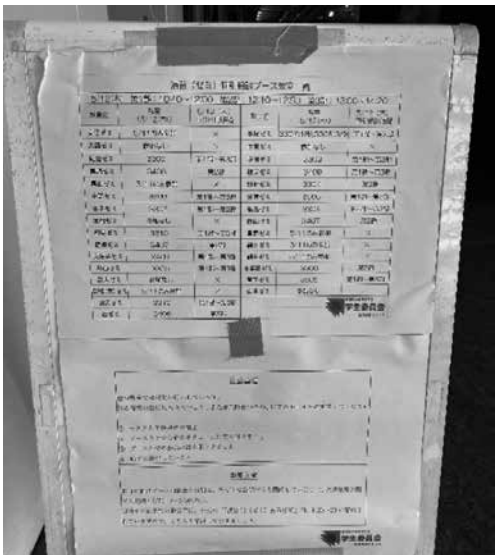
● はい
● いいえ

ゼミ個別ブース説明会

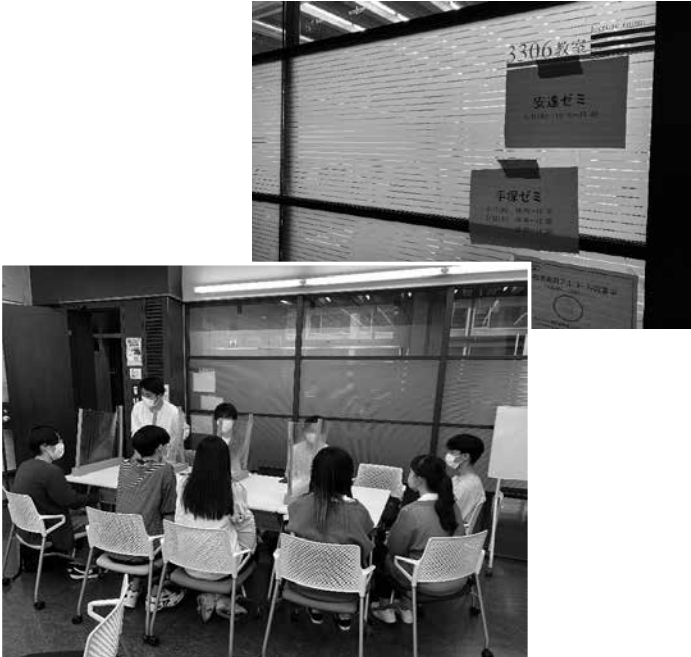
5月11日(水)12:10-17:00、5月12日(木)10:30-14:30の両日3部制で、経済学部2年生を対象とした「ゼミ個別ブース相談会」を開催した。当日は3号館の3階～5階を使用し、2年ぶりの対面開催となった。

本イベントの目的は、ゼミ選びをしている2年生が、ゼミ生やゼミの先生と直接コミュニケーションをとりながら情報を集めることで、本当に自分が入りたいゼミを選ぶきっかけになることである。

5月11日(水)に22のゼミが参加し、5月12日(木)には19のゼミが参加した。参加者の延べ人数は推定250人程度と、多くの2年生が参加してくれた。



本イベントを通して、昨年度と比較して告知をしっかりとったため、参加者が多かったという声があった。一方で、参加者側に寄り添ったブースの作り方に改善の余地があるという声もあがった。



後記(感想)

来年に向けて、運営メンバーの人数について改善が必要だと感じた。

1人で運営することにより視野が狭くなり、やるべきことに気付いたとしても対応できない結果、ゼミ生が混乱してしまうという問題が生じた。

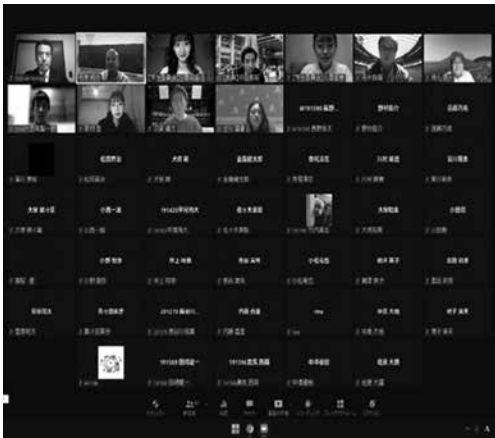
準備段階でのミスをなくし円滑な運営をすることで、2年生にとって有意義なゼミ選びができるよう支援していきたい。

(経営学科 3年 島田莉那)

業界地図と四季報の見方

2022年6月22日に東洋経済新報社の田宮寛之様をお呼びして、昨年と同様に業界地図と四季報の見方について講演会を行った。しかし、今年は新型コロナウイルス感染症拡大以降初となる対面形式を含んだハイブリッド形式での開催であった。そのため、当日は会場設営に加えてオンライン会場の構築も行った。

講演会の内容については昨年と同様に東洋経済新報社の著書である業界地図、四季報の見方について指導してもらうものであったが、学生が就職活動やインターンでの企業研究に活用できるように6月の実施となった。



昨年から始まったイベントであったため、チラシの掲載や在学生へのメール、SNSやホームページ掲載など広告に力をいれた。結果的に70人以上の学生に参加していただくことができた。その反面、対面での参加者がごく少数であったこと、双方向のやり取りが必要ないイベントであることから、この時期に就職活動関連のイベントに積極的な学生は少数で需要も少ない可能性があると感じた。

後記（感想）

今回は当日までの時間が少ないことや、昨年から始まったイベントで引継ぎ内容が少なことから、運営がかなり難しかった。演者とのやり取りに加え、全体の進捗の把握、欠けている資料や作業の埋め合わせや遅れている作業のサポートなど、多くの業務に追われてマネジメントがおろそかになってしまった。そのため、演者とのやり取りが必要な講演会やイベントなどはリーダーを2人にするによってマネジメントと演者との連携を分担して円滑に回るような体制を築いていくことが必要と感じた。

加えて、6月に就活関連のイベントは、対面参加者の人数や双方向のやり取りへの積極性からみて需要が少ないのではないかと感じた。そのため、3月の採用活動解禁前など必要に迫られている時期の方が需要があると感じた。

（経営学科 3年 小南絢音）

FACULTY OF ECONOMICS

インターンシップ参加に役立っ情報がいっぱい!

業界地図と四季報の見方

2022.6.22 Wed. (16:10~18:10)
 於：国学院大学渋谷キャンパス2号館 2301教室
 (Zoomを用いたハイブリッド形式での開催)

ZoomのURLは、大学から月末に告知済みの連絡をご確認ください。
 (対面・オンラインのいずれも予約不要)

業界を理解して自分にあった会社を見つけ、キャリアの第一歩をしっかりと踏み出すために『業界地図』と『四季報』の見方を学ぼう!

『四季報』 『業界地図』 『四季報』

主催 国学院大学経済学会
 企画・協力 国学院大学経済学会学生委員会

講師紹介
 東洋経済新報社 記者・編集委員、
 「業界オンライン」「週刊東洋経済」「四季報」などに執筆。
 全国の大学やキャリア団体での講演も手掛ける。

講師 田宮寛之
 Tamaya Hiroyuki

何があっても
 潰れない会社
 株式会社
 東洋経済新報社

絆づくりプロジェクト

【イベントの内容】

2022年7月2日に絆づくりプロジェクトを開催した。本イベントは、本校の経済学部4年生や卒業生から就職活動やキャリア形成、経験した職業について話を聞くことができるイベントである。

毎年、3月の採用活動解禁に向けて2月の頭に開催していたが、6月のインターン解禁に向けて、今年は7月と2月の2回に分けて開催することにした。狙いとしては、キャリア形成や業界、企業研究に活用するために7月に卒業生を招待し、2月には就職活動に絞った話を聞くために4年生を招待することとした。

(※その後、2月の回は中止となった。)

【周りの反応】

毎年好評であるため、今年も参加者からの評判は良かった。「この時期に話を聴くことが出来て良かった」という声もあれば、「時期尚早でどこに聞きに行けば良いかも分からない」という声もあり開催時期に関して賛否両論であった。ただ参加者が少ないことが今後も懸念されるため、例年通りの開催時期の方がよいと感じた。



【後記（感想）】

7月開催は需要が少なく双方向のやり取りが必要なイベントであったことから、参加者が少なくなりました。そのため、例年通りの2月に開催した方がメリットが大きいと感じた。

(経営学科 3年

小南絢音)

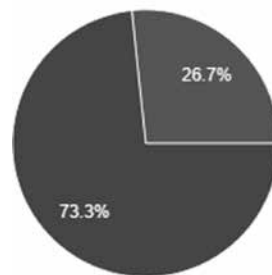
第1回 E-Tour (7月9日)

2022年7月9日にE-tourを開催した。開催目的としては、現高校2・3年性を対象に大学生活の一部を体験してもらうことで、大学生活をイメージしてもらうとともに、國學院大學経済学部への興味関心を募るものであった。開催形式は、去年と同様にオンラインでの開催であった。

参加人数は、15名（事前確定者24名、当日参加15名）であった。

コンテンツ内容としては、例年と大枠は変化しないものであった。アイスブレイク、学科・AL授業紹介、模擬授業、フリートークに加え今回は、新コンテンツである「国大生ツアー」という、国大生の生活の一例を紹介し、大学生活をより高校生にイメージしてもらうことに注力した回であった。

参加満足度も振り返りアンケートで「楽しかった」以上の回答をしてくれた参加者が100%であったため、イベントの内容の質は高いものであった。



- とても楽しかった
- 楽しかった
- 普通
- つまらなかった
- 参加しなければよかった

今回の会で注力した、「国大生ツアー」であったが、改善すべきポイントは大きいと感じる。

最重要なのは、当日の発表担当の求心力。準備段階でより、聞きやすいような工夫や仕組みを検討・導入するとより良くなっていく。

満足度が高いからこそ、今後も続けていくコンテンツであるからこそ、内容の向上を願う。

後記（感想）

今回の経験を通し、運営側での改善点とイベント全体を通し、向上させるべきポイントが判明した。

しかし、大前提イベントの内容は歴代の遺産や新しい刺激を基に高いものである。それを踏まえたでの課題としては参加者の確保に尽きると感じる。

今後のイベントの向上を願う。

楽しくイベント運営を行うことや、メンバーの協力を得ることが出来たことで良い経験をする事が出来ました。

（経営学科 3年 佐藤大鷹）

第2回 E-Tour (9月10日)

2022年9月10日(土)15:00~18:00に、今年度第2回目となるE-Tourを実施した。新型コロナウイルスの感染状況を考慮し、Zoomを利用したオンライン形式での開催となった。本学への指定校推薦やAO入試を検討中の高校3年生とその他2・3年生を主な対象とし、高校生17名、学生スタッフ15名が参加した。

今回のE-Tourでは、「國學院大學経済学部」に強く入学したいと一人でも多くの高校生に思ってもらうことを開催目的として設定し、コンテンツ作成を行った。

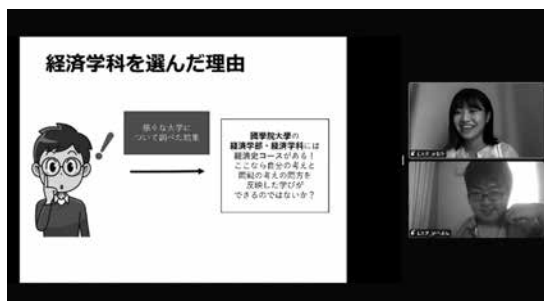
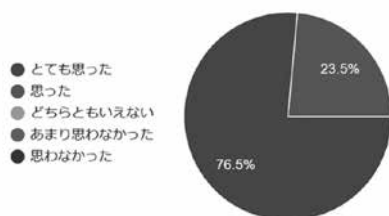
当日は、先生からの「学部紹介」により経済学部の概要を説明した後、学生からの「学科・アクティブラーニング型授業紹介」により、リアルな意見をもとにした各学科の魅力を発信した。メインコンテンツとなる「模擬授業」では、行動経済学とペルソナ分析を題材として取り上げた。経済学と経営学の違いと繋がりを、経済学部の特徴であるアクティブラーニングを用いて学んでもらった。加えて、学生の1日を紹介する「国大生ツアー」や、大学生と自由に対話する「フリートーク」なども行った。全体を通して、高校生が大学生活をより具体的にイメージし、入試へのモチベーションにしてもらえることを意識した。

参加後のアンケートを見ると、参加者の全員が國學院大學へ入学してみたいと回答していた。さらに、全てのコンテンツにおいて満足度が第1回から向上していた。このことから、前回の振り返りを生かし、高校生の志望度の高さを意識した、目標に沿った質の高い内容を作り上げられたといえる。

しかし、事前の応募者数に対する当日の参加者数の少なさが目立っていたため、集客力や当日キャンセルの多さへの対応が改善点としてあげられる。

國學院大學に入学してみたいと思いませんか？

17件の回答



後記 (感想)

リーダーという役割を務めるのは初めてだったため、限られた時間の中で目標に向けて指揮を執ることは想像以上に難しかった。しかし、周囲の方々の助けもあり、クオリティの高さにこだわった満足度の高いものを作り出すことができたと感じる。一方で、会議への出席率が低いことや、本番直前の連絡が多かったことは運営としての改善点であると感じた。そのため、今後は初回から振り返りまでの全ての会議日程を予め決めておいたり、やるべきことのリストアップをしたりと、早めの準備を意識してさらに良いイベントにしていって欲しい。

(経済学科 3年 佐々木美聡)

第3回 E-Tour (11月19日)

2022年11月19日（土）の13:00～16:00に、第3回E-tourを開催した。今回のE-tourは実に3年ぶりとなる対面で開催された。系列3高校の内部推薦で進学が決定した3年生が対象であり、84名が参加した。開催目的は「大学生への憧れを持ってもらい、入学のモチベーションにしてもらう！」というものであった。

先生方による経済学部への紹介や学生スタッフによる両学科・アクティブラーニング型授業の紹介で、学部学科の魅力を先生目線と学生目線で発信し、その後の模擬授業で実際に体験してもらった。模擬授業はペルソナ分析と行動経済学を扱い、グループワークでコミュニケーションを取りながら経済と経営ふたつの魅力を、本学経済学部の大きな特徴であるアクティブラーニングを用いながら行った。模擬授業後は、学生スタッフが構内を回りながら高校生に施設を紹介する「キャンパスツアー」をし、高校生に大学の魅力を伝えた。

Q12.アクティブラーニング型の授業をもっと受けてみたいですか
86件の回答



ほかの回のE-tourに比べ高校でのクラスメイトや学友で参加する高校生が多くコミュニケーションを取ることに苦労はあまりなかったように感じた。学生スタッフとも打ち解けが早く自主的に質問をしてくるなど積極的な高校生が多かった。

参加後のアンケートでは「アクティブラーニング型授業を受けてみたい」と答えるなど学部への魅力を伝えることができた。



後記（感想）

3年ぶりの対面開催ということで参加した学生スタッフ全員が初めての経験であったためノウハウが全くないために、スタッフへの苦労をたくさんかけてしまう回であったと感じた。

しかし、学生スタッフの協力のおかげで本番まで大きなトラブルもなく成功という最高の結果を残すことができた。

準備や計画の段階で多くのリスクヘッジをすることの大切さや、タスク量の偏りの解消の必要性を感じた。

（経済学科 3年 山口稜馬）

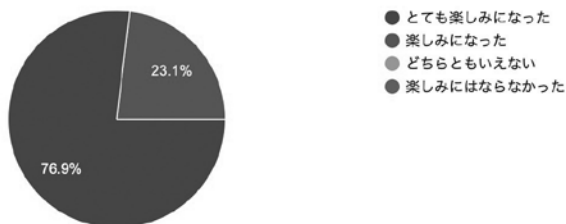
第4回 E-Tour (12月18日)

2022年12月17日(土) 15:00~18:00に、今年度最後となる第4回E-tourを開催した。新型コロナウイルスの感染状況や、参加する高校生の参加のしやすさを考慮し、今回もzoomを用いたオンライン形式で行った。主な参加対象者は、指定校推薦や総合型選抜、公募推薦による本学への入学が決定している高校3年生と、その他高校1、2年生であり、当日は高校生41名、学生スタッフ17名が参加した。

今回の開催目的は、「“國學院にして良かった！入学が待ち遠しい！”と感じてもらおう”ことであった。当イベントにおいては、先生による学部紹介や、学生による学科・アクティブラーニング授業紹介で学部や学科の魅力を発信したのち、模擬授業を行った。模擬授業では、行動経済学とペルソナ分析という2つのテーマを取り上げ、高校生にはグループワークを通じて、経済学・経営学の両方を“アクティブラーニング”という、本学経済学部の特徴でもある学び方で体感してもらった。

模擬授業終了後には、大学生の1日に密着する「国大生ツアー」というコンテンツにおいて、クイズも交えながら学生スタッフが普段の様子を紹介したり、高校生が抱く不安や疑問を、大学生との対話を通じて解消してもらおうという時間も設けた。

國學院大學への入学が楽しみになりましたか？



参加した高校生は、慣れないグループワークに最初は緊張した面持ちであったものの、学生スタッフや同じグループの高校生との会話を通じて、次第に楽しそうに参加している様子であった。

参加後のアンケートの回答結果からも、高校生の満足度の高さがうかがえる。全体の100%の高校生が「アクティブラーニング授業をもっと受けてみたい」と回答してくれていた。



後記(感想)

第3回E-tour開催後からの準備期間が短かった上に、開催日直前まで参加者数が確定せず、学生スタッフの数や配置の検討が非常に大変な回であった。それでも、運営に協力してくれた学生スタッフのおかげで、大きなトラブルもなく、定刻通りにイベントを終えることができた。

E-tourを開催するにあたり、準備段階において当日の様々なリスクを想定し、それに備えておくことや、運営メンバー同士の連携が求められることを改めて実感した回であった。

(経営学科 3年 熊谷実咲)

学生委員長のことば

経済学会学生委員会委員長 熊谷 実咲

2022年度の学生委員会では、「目的の明確化と連携」を目標に掲げて活動しました。コロナ禍に突入してから早くも3年の月日が経ち、私たちの大学生生活が以前の状態に近い形まで戻りつつあった今年度は、複数のイベントの対面開催を実現することができました。大学に入学後、対面開催のイベントを手掛ける経験のなかった私たちが、イベントの成功に向けて試行錯誤を重ねる過程の中で、この目標は重要な役割を果たしていたように感じます。

まず、「目的の明確化」については、イベントを行う際に開催目的を明らかにすることで、学生委員会メンバー間で共通認識を持って、活動に取り組むことができました。具体的には、そのイベントの参加対象者は誰なのか、学生委員会として参加者に何を提供できるのかなどを考えて目的を決めた後、準備過程において全体で確認をするよう心がけました。その結果、イベント当日まで、各々が開催目的を頭に入れて運営にあたることができました。

学生委員会の外部の皆様方にもご協力をいただいたイベントについては、定期的に開催しているゼミ代表会議などの場において、イベントの開催目的と内容に認識の齟齬が生じることのないよう、わかりやすい形でご説明することを心がけておりました。その上で、一部のイベントについては、目的を理解しやすいような名称に変更しました。

また、目標の「連携」の部分に関連して、学生委員会ではイベントの作業工程表を作成しました。この仕組みの導入によって、イベント開催に必要な準備事項を一目で確認できるようになり、進捗を把握しやすくなりました。さらに、学生委員会内部だけでなく、外部の皆様方との連携も図ることができたように感じています。基礎演習やゼミにおける告知が必要になった際には、学生委員会に関わる皆様方にもご協力をいただくことができたおかげで、イベントの認知度を高めることができ、それが集客にもつながりました。

新型コロナウイルスの扱いが変わるなど世の中の変化に伴い、2023年度は、対面形式でのイベント開催の機会がより一層増えることが予想されます。今年度新たに作成した作業工程表を活用することに加えて、これまで築き上げた学生委員会内部での協力体制と、外部の皆様方との関係性を大切にしながら、今後も学生委員会としての活動を継続していかれたらと考えております。

最後になりますが、私たち学生委員会が年間を通じて活動を続けることができたのは、経済学部の教員および職員の皆様、各ゼミ代表をはじめとする経済学部生の皆様のお力添えのおかげです。この場をお借りして心より感謝申し上げます。そして、今後とも学生委員会の活動を見守ってくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

学生委員長のことば

経済学会学生委員会委員長 島田 莉那

2022年度は学生委員会にとって、「探求」の一年となりました。2019年まで学生委員会では全面対面の活動が続いておりましたが、2020年に新型コロナウイルスが流行してからは全面オンラインの活動へと移行しました。そして2021年からは、新型コロナウイルスの蔓延が弱まったことから対面で活動できる機会が増え、対面活動とオンライン活動を組み合わせたハイブリッド活動となりました。学生委員会は少しずつ取り戻された対面活動を好機であると捉え、オンライン活動を通じて得た新しい知見を既存のイベントに取り入れながら試行錯誤し、今までにない組織体制として2022年、新たに2つの取り組みを行いました。

1つ目は、プロジェクト・マネージャーの導入です。イベントのリーダーを務めていた3年生は、4年生になってもプロジェクト・マネージャーとして、3年生が主体的に進めるイベント全体を監督する役割を引き受けました。これにより、学生がより自立した運営組織へと変わり、大学に貢献できる組織へと進化しています。

2つ目は、広報戦略統括の新設です。学生委員会では近年、イベントの満足度は高いものの、参加者数が少ないことが課題でした。これに対して、2021年はInstagramを新しく開設することで國學院大学の発信に努めていましたが、これだけでは十分な集客が見込めませんでした。そこで2022年はさらに集客を強化しようと、広報に関して意識的に考えられる組織体制を作り、SNSへの投稿スケジュールやコンテンツを再考しました。その結果、ゼミ個別ブース相談会の参加者が前年の3倍以上になるなど、多くの学生に参加していただくことができました。

このように、学生委員会では課題をそのままにせず、どのようにしたら改善できるかという考えを持ち活動することができます。

2023年からは、新しいことを試みます。2022年には、イベント運営にあたっての準備事項と、着手すべき時期を一目で把握できるよう作業工程表を作成しました。2023年はこれを活用し、抜け漏れなく準備をすることができる上に、リーダーを務める学生の負荷を軽減し、余裕を持ったイベント運営を目指します。これにより、イベントの価値を向上させ、大学に貢献できる組織へと進化したいです。そのため、今後も学生委員会の活動を見守ってくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、日頃から学生委員会の活動を支えてくださった経済学部の教員ならびに職員の方々、各ゼミ代表を始めとした経済学部生の皆さま、学生委員の皆さまへ、この場をお借りして心より感謝を申し上げます。

学生委員会活動を振り返って

学生委員会担当教員 櫻井 潤・中田 有祐

本年度、学生委員会は、経済学部や経済学会に協力する形で以下のイベントを実施しました。その他、SNSでの経済学部に関する情報の発信も随時行っています。

・学部学生を対象としたイベント

- (1) 新入生オリエンテーション（4月）
- (2) ゼミ個別ブース相談会（5月）
- (3) 特別講演「業界地図と四季報の見方」（6月）
- (4) 「絆づくり」プロジェクト（7月）

・高校生を対象としたイベント

- (5) 経済学部リアル体験ツアー（E-Tour）（7月、9月、11月、12月）

※イベントの詳細は、本誌内の各ページを参照してください。

令和4年度も前年に続き委員長2名体制で、学生委員会に所属する27名の学生が主体的に各イベントの実施に向けて取り組みました。以下に、令和4年度の総括と次年度に向けた課題を示します。

令和4年度は、令和2・3年度がほとんどオンラインイベント中心だったのに対して、情勢の変化から対面イベントを複数実施できるようになり、所属学生も試行錯誤しながらの取り組みとなりました。そのような中で、対内的には協働の強化、対外的にはイベントの開催目的・内容の伝達の徹底という行動指針を掲げ、活動を行ってきました。所属学生がそれぞれ主体的に行動し、助け合うことで協働の強化は図れており、各イベントの完成度はとても高いものに仕上がっていましたが、対外的な情報発信については、イベントによっては参加者数が少ないなど課題も残りました。

また、新たに、4年生のプロジェクトマネージャー制度の運用を開始しています。この制度は、経験豊富な4年生が下級生にアドバイスを行うことでの、各プロジェクトのコントロール、担当教員の目の行き届かない部分のフォローが狙いです。本年度は運用初年度ということもあり、4年生の就活期に重なるイベントではなかなか機能しないなどいくつか課題も残りましたので、次年度に向けて運用の仕方の改善が望まれます。

次年度に向けては、タスクの整理が急務です。本年度は、前期にイベントが集中していたこともあり、「イベントの準備に追われている」感が色濃く、学生が楽しむ余裕なく活動していた印象もありました。次年度は、本年度に比べて、所属学生の人数が減るであろうことが予想されており、イベントの整理や自分たちのマンパワーを考慮した無理のない実施計画の策定が求められます。